

小学校への移行期の子どもを持つ母親の 適応に関する研究

— 小学校入学前後の比較及び入学後の変容過程の探索的検討 —

The Adaptation of Parents during Their Children's School Transition from Kindergarten to Elementary School: Comparison study before and after entering elementary school and Exploratory study after entering elementary school.

西坂 小百合¹、村上 康子¹、綾野 鈴子²、権藤 桂子³

Sayuri NISHIZAKA, Yasuko MURAKAMI, Suzuko AYANO, Keiko GONDO

【はじめに】

幼稚園・保育所等から小学校への移行期は子どもにとっては大きな変化の時であり、幼保小接続といった言葉に代表されるように、児童のスムーズな移行、つまり安定した適応が重要な課題となっている。そうした移行期における円滑な移行を支える親の役割もまた重要であり(OECD, 2017)、移行期の子どもをもつ親の期待や不安といった意識とその変容過程についても検討する必要がある。移行期における親の期待や不安についての探索的な研究(例えば椋田, 2013; 富山, 2014; 2015 など)においては、子どもの友達関係や教師との関係など、学校生活における「子ども」を取り巻く不安があることが示されている。しかしながら、親自身と教師との関係、他の親との関係など、親自身の抱く期待や不安について十分な言及がないことを綾野・西坂・村上・権藤(2019)は指摘し、Wildgruber, A., Griebel, W., Niesel, R. & Nagel, B. (2011)の理論モデルを用いて、個人のレベル、関係のレベル、環境のレベルの3つのレベルに基づいて親の期待や不安を捉えようと試み

ている。母親を対象とした探索的な面接調査から、個人のレベルには親自身が小学生の親としての自分をどのように感じているか、子どもの様子に関して親が得られる情報の程度などが含まれること、関係のレベルには教師との関係及び子どもとの関係が含まれること、環境のレベルには親自身の学校生活への関与が含まれることを見出している。また母親自身が情報を得ることによって不安が軽減されること、第1子において第2子以降よりも不安があることも仮説として成り立つ可能性を示唆している。西坂・綾野・村上・権藤(2021)は、3つのレベルをもとに構成された期待や不安などの親の意識を尋ねる調査項目を用いて就学前の期待と不安の様相を検討し、「自分自身の生活への変化への期待」「子どもの様子がわからなくなることへの不安」「小学生の親になる自信」の3つの因子を確認するとともに、それらが3つのレベルにそれぞれ相当するとしている。さらに、幼稚園と保育所の比較を行い、「子どもの様子がわからなくなることへの不安」は幼保に関係なく第1子の親のほうが第2子以降の親よりも高いこと、「小学生の親になる自信」は幼稚園の親

1 共立女子大学

2 駒沢女子短期大学

3 共立女子大学名誉教授

のほうが高いこと、「自分自身の生活の変化への期待」は幼稚園の第2子以降の親で高いことを示している。小学生の子どもの生活や親の関わり方についての情報を提供する、あるいは小学生の子どもをもつ親との情報共有の機会を提供するなど、就学前の保護者支援の可能性についての一定の示唆が得られているが、それらの期待や不安が就学後の変容について検討することも必要であると考えられる。そこで本研究においては、就学前に抱いていた不安が解消されたのか、また新たに不安が生じていないかなど、就学前後での変容を検討することを目的とする。これにより保護者支援のさらなる資料を収集することができると考えられる。具体的には、研究1として入学前2か月及び入学後2か月ごろにペアデータを収集し、親の期待や不安の得点の推移を出生順位との関係で検討する。また研究2として、入学してから1年、2年、3年と進級していく過程で、これらの不安や期待がどのように変容していくのかを探索的に検討する。

【研究1】

1. 目的

研究1の目的は小学校入学前と入学後における親の期待や不安の変容を検討することである。親の期待や不安などの意識得点が、入学前後で変容するかどうか、またそれらが子どもの出生順位によって影響を受けるかどうかを検討する。綾野ら(2019)及び西坂ら(2021)においても、第1子であることが既有経験の無さと関連し、第2子以降で既有経験のある親に比べて情報が少ないことから、不安が高いことが示さ

れている。本研究においては、それらが入学後の変容にも影響を及ぼすかどうか検討を試みる。

2. 方法

(1) 調査対象と時期、手続き

小学校入学2ヶ月前及び入学後2ヶ月後程度である、2017年2月及び5月、2018年2月及び5月を調査時期とした。2月の調査は、東京近郊の幼稚園に依頼し、園を通して配布・回収してもらった。その際、入学後5月の調査への協力を、調査用紙を通して依頼し、承諾が得られた回答者を対象として、個別郵送による調査を5月に実施した。就学前調査の配布数は523部、回収数は262部(回収率50.1%)であった。回答者はすべて母親であり、年齢の内訳は20代が5人(1.9%)、30代が131人(50.0%)、40歳以上が123人(46.9%)、無回答が3人(1.2%)、就労状況は無職が192人(73.3%)、パートタイムが52人(19.8%)、フルタイムが3人(1.1%)、無回答が15人(5.8%)であった。262人の回答者のうち、就学後調査協力の承諾が得られたのは90人であり、調査用紙を郵送により配布・回収したところ、回収数は66部(回収率73.3%)であった。年齢の内訳は30代が32人(48.5%)、40歳以上が34人(51.5%)、就労状況は無職が55人(83.3%)、パートタイムが5人(7.6%)、その他が6人(9.1%)であった。就学前のデータ分析においては262人の回答を使用し、就学前後の比較分析においては両方のデータが揃っている66人の回答を使用した。それぞれのデータにおける子どもの性別および出生順位の内訳はTable 1に示す通りで

Table 1 調査対象者の子どもの性別と出生順位の内訳

子どもの性別		第1子	第2子以降	計	合計
就学前調査	男児	72 (55.8%)	57 (44.2%)	129 (100.0%)	262
	女児	60 (45.1%)	73 (54.9%)	133 (100.0%)	
就学後調査	男児	15 (46.9%)	17 (53.1%)	32 (100.0%)	66
	女児	18 (52.9%)	16 (47.1%)	34 (100.0%)	

ある。

(2) 調査内容

①移行期の親の意識

西坂ら (2021) で用いられた移行期の親の期待や不安などの意識を測定する尺度 18 項目を使用した。これは Wildgruber ら (2011) によって示された理論モデルに基づき、綾野ら (2019) が移行期の親の意識変容の内容を面接調査により整理した内容に基づいて作成されている。「自分自身の生活への変化への期待」「子どもの様子がわからなくなることへの不安」「小学生の親になる自信」の 3 つの因子が確認されている。回答法は「かなりそう思う」から「まったくそう思わない」の 5 件法である。

②フェイスシート

親の年齢、子どもの出生順位および、就学についての疑問の解消方法などを尋ねた。

(3) 倫理的配慮

質問紙調査の協力者には、あらかじめ書面において調査の趣旨や目的について説明し、調査への回答をもって承諾が得られたものとした。

調査は無記名で行われるが、就学前後の調査用紙の連結化のために住所等の情報が必要となり、これらは ID とは別に保管されることを説明した。なお本研究は、共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理審査委員会の承認を受けた (KWU-IRBA#17118)。

3. 結果と考察

(1) 就学前の親意識尺度項目の分析

就学前の親の意識に関する 18 項目のうち、平均値と標準偏差から分散に偏りのある 3 項目を除く 15 項目に対して因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行った。3 因子を想定して作成されていたことから、分析の際には因子数を 3 に設定した。その結果、固有値 1.00 以上の因子が 3 抽出され (固有値: 2.55, 1.79, 1.23)、累積寄与率は 55.79% であった。プロマックス回転後の因子パターンと因子間相関を Table 2 に示す。第 1 因子は、「2 子どもが学校でどのように過ごしているのか、わからないのではないか心配である」「12 先生に気軽に相

Table 2 就学前の親の意識項目の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

	I	II	III	M (SD)
I 子どもの様子がわからなくなる不安				
2 子どもが学校でどのように過ごしているのか、わからないのではないか心配である*	.642	.061	-.015	2.44 (1.04)
12 先生に気軽に相談したりできるか不安である*	.570	.000	.139	2.76 (1.09)
3 子どもの学校での成績が気になる*	.557	.075	-.331	2.23 (0.90)
10 PTA への参加に不安がある*	.498	.000	.366	2.40 (1.06)
17 放課後など子どもが一人で行動する範囲が広がるので心配である*	.490	-.119	-.051	2.02 (0.96)
II 自分自身の生活の変化への期待				
16 子どもが小学校に入学したら自分も新しいことをしようと思う	.000	.931	-.006	3.59 (1.15)
13 子どもがいない時間の使い方が変わると思う	.003	.519	.060	3.65 (1.21)
III 小学生の親になる自信				
7 親自身、他の保護者とうまくやっていけると思う	.044	-.043	.579	3.36 (0.81)
8 授業や行事など、親の手伝いが必要であればできると思う	-.004	.021	.560	3.64 (0.88)
18 学校の準備や宿題を見るなど、子どもを手伝うことができると思う	-.203	.117	.481	4.06 (0.67)
因子間相関	I	II	III	
I	-	.113	.320	
II		-	.323	
III			-	

*逆転項目

Table 3 出生順位、就学前後による親の意識の各下位尺度得点 (括弧内は標準偏差)

	第1子 (N=33)		第2子以降 (N=33)	
	就学前	就学後	就学前	就学後
I 子どもの様子がわからなくなる不安*	2.03 (.62)	2.67 (.66)	2.72 (.52)	2.99 (.52)
II 自分自身の生活の変化への期待	3.53 (1.16)	3.58 (.88)	4.30 (.60)	4.06 (.76)
III 小学生の親になる自信	3.87 (.53)	3.77 (.63)	3.87 (.47)	3.96 (.58)

* 「I子どもの様子がわからなくなる不安」は逆転項目のため、得点が低いほど不安が高いことを示している。

談したりできるか不安である」など、子どもの様子を知ることが難しくなることに対する不安であることから「子どもの様子がわからなくなる不安」と命名した。第2因子は、「16子どもが小学校に入学したら自分も新しいことをしようと思う」「13子どもがいない時間の使い方が変わると思う」など、小学校入学に伴う時間の使い方や生活の変化に対する期待を表す項目であることから「自分自身の生活の変化への期待」と命名した。第3因子は、「7親自身、他の保護者とうまくやっているとと思う」「18学校の準備や宿題を見るなど、子どもを手伝うことができると思う」など、小学生の親としての自信を表していることから、「小学生の親になる自信」と命名した。

(2) 子どもの出生順位による就学前後の親の意識の変容の分析

Table 3は子どもの出生順位別に就学前後の親の意識項目の因子ごとの平均点を算出したものである。なお、就学後の得点は就学前の因子分析結果に基づいて項目群における得点の平均点を算出し、分析に用いた。就学前後を被験者内要因、出生順位を被験者間要因とし、親の意識の各得点を従属変数とする2要因分散分析を行った。

その結果、「I子どもの様子がわからなくなる不安」については、就学前後の主効果 ($F(1,64)=49.62, p<.01, \eta_p^2=.44$)、出生順位の主効果 ($F(1,64)=15.03, p<.01, \eta_p^2=.19$)、および交互作用 ($F(1,64)=8.14, p<.01, \eta_p^2=.01$) が有意であった。交互作用の分析においては、就学前

における出生順位 (第2子以降<第1子, $p<.01$)、就学後における出生順位 (第2子以降<第1子, $p<.05$)、第1子における就学前後 (就学後<就学前, $p<.01$)、第2子以降における就学前後 (就学後<就学前, $p<.01$) に有意差が示された。Figure 1に示されるように、第2子以降よりも第1子が、また就学後よりも就学前のほうが不安が高く、就学前の不安は就学後に軽減あるいは解消された可能性があること、また第2子以降の親は第1子の経験があることで不安が低いと推察される。

「II自分自身の生活の変化への期待」については、出生順位による主効果のみが有意であり ($F(1,64)=11.72, p<.01, \eta_p^2=.16$)、就学前後の主効果および交互作用は有意ではなかった。Figure 2に示されるように、第2子以降の親のほうが期待が高く、第2子以降の親は第1子等の経験から、小学校入学に伴って時間的な余裕ができることへの期待があると考えられる。一方できょうだい構成による影響も考えられ、第2子以降の子どもが末子の場合に子どもが全員小学生以上になることで余裕がでる可能性があり、逆に第1子の親には第2子以降の未就学児がいるために第1子が入学しても自分自身の生活への余裕は期待できないとも考えられる。

「III小学生の親になる自信」については、いずれの効果も有意ではなかった。就学後2か月程度ということもあり、他の保護者との関わりや子どもの学校生活への支援などの機会が限定的であると予想され、自信が変化するには至らなかったと考えられる。

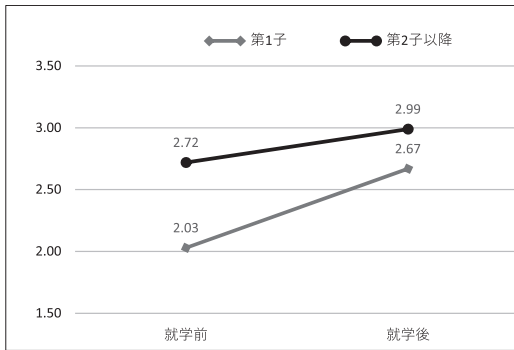


Figure 1 就学前後における出生順位別「I子どもの様子がわからなくなる不安」得点

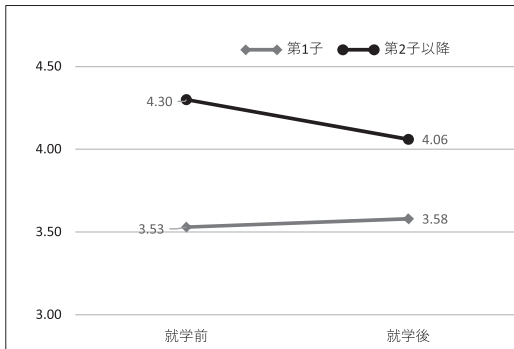


Figure 2 就学前後における出生順位別「II自分自身の生活の変化への期待」得点

【研究2】

1. 目的

研究2の目的は、幼保小移行期における親の期待や不安が子どもの小学校入学後1～3年の間において、これらの期待や不安がどのように変容するのかを検討することである。変容過程

を検討するにあたり、同じコホートを縦断的に追跡する方法ではなく、横断的に1～3年生の親を対象とした調査を実施することとした。これは個別の期待や不安が変容する過程というよりは、多様な期待と不安を網羅的に把握できると考えられるためである。調査内容についても、自由記述を中心として子どもが小学生になってからの様々な変化について尋ねることで、その記述内容から小学校1～3年における親の意識の変容について、探索的に分析を試みるものである。

2. 方法

(1) 調査対象と時期、手続き

小学校1～3年生の保護者を対象に、2020年1月、質問紙による調査を実施した。対象者は【研究1】及び2019年2月に保育所の保護者を対象に行った調査において継続調査の許可が得られた103人であり、郵送で調査を依頼した。そのうち回答の得られた48人を分析の対象とした(回収率46.6%)。母親の就労状況は、フルタイムが8人(16.7%)、パートタイムが16人(33.3%)、無職が19人(39.6%)、5人(9.4%)がその他であった。対象となる子どもの出生順位は、第1子35人(72.9%)、第2子以降が13人(27.1%)であった。対象者の子どもの学年及び性別の内訳はTable 4に示す通りである。

(2) 調査内容

小学校入学後の期待や不安の変容について、5つの項目を設定して自由記述で回答を求めた。それらは、就学前に抱いていた不安の解消と新たな心配事、子どもとの関わり、先生・学

Table 4 対象者の子どもの学年及び性別の内訳 (N=48)

	1年生	2年生	3年生	合計
男児	6 (22.2%)	16 (59.3%)	5 (18.5%)	27 (100.0%)
女児	6 (28.6%)	11 (52.4%)	4 (19.0%)	21 (100.0%)
合計	12 (25.0%)	27 (56.3%)	9 (18.8%)	48 (100.0%)

校との関わり、親自身の生活の変化、子どもが小学生になってうれしかったこと、である。

3. 結果と考察

入学後の期待や不安の変化についての自由記述は内容を学年ごとにまとめた。それぞれの自由記述の記述数と主な記述内容は Table 5 のとおりである。

就学前に抱いていた不安は1年生では「様子がわからず解消されない部分もある」が、次第に解消され、学年が上がっていくにしたがってそれが「漠然とした不安」だったことに気づいたり、「何が不安だったか思い出せない」などの様子が示された。一方で、新たな心配事が出てきて、友達のことなど具体的なことや、今後の学校生活や教育を心配する様子が示されている。

子どもとの関わりについては、小学生になることで、親が子どもの姿を直接見る時間が減少し、「親の知らない子どもの世界が急に広がった」ように感じるとともに、積極的な関与から見守りの姿勢になる様子がうかがえる。子どもの様子は子どもとの会話から知るようになるなど、子どもとの関わり方に変化が見られるが、寂しいと感じつつも、不安というほどではなく、その変化を受容しているといえる。

一方で先生や学校との関わりについては、「先生と話す機会がほとんどない」、「気軽に相談できる雰囲気ではない」など、幼稚園・保育所までの先生との関わり方とは大きく変化し、直接の関わりが減少し、そこに「距離感を感じ」ている様子がうかがえる。3年生になるとその関わりの減少に「慣れて」しまうこともあるようだが、おそらく入学して間もない頃は不安を感じたり不満を抱いたりした可能性があると考えられる。

親自身の生活は、就労状況や子どものきょうだい構成などによって影響を受けると考えられる。「自分の時間ができたので習い事を始めた」り、「フルタイムの仕事を探し始めた」、「近所

のできる仕事を始めた」など、時間に余裕ができて新しいことを始める親がいる一方で、「未就学の子がいるので、時間の使い方が難しくなった」という場合もある。学年が上がるにしたがって、「受験準備」や仕事のための資格取得など、将来のことを見据えた時間の使い方になるようである。

最後に、子どもが小学生になってうれしかったことについては、概ね、子どもが楽しく学校生活を送れることや子どもの成長に喜びを感じていることが示された。子どもの成長は、発達に伴って変化し、その変化を好意的に受け止めていると考えられる。

【総合考察】

本研究の目的は、就学前後での親の期待や不安などの意識の変容を子どもの出生順位との関連で検討すること、さらには入学後1～3年における期待や不安の内容を探索的に検討することであった。就学前の親の期待や不安などの意識は、「Ⅰ子どもの様子がわからなくなる不安」「Ⅱ自分自身の生活の変化への期待」「Ⅲ小学生の親になる自信」の3つの因子が確認され、これらは西坂ら(2021)の分析と概ね同様の結果であった。またこれら3つの因子のうち「Ⅰ子どもの様子がわからなくなる不安」は、就学前の第1子の親が第2子以降の親に比べて高く、就学後にそれぞれ軽減されることが示された。第1子においては既有経験が無く、それに伴い事前情報が得にくいことなどから、小学生になる子どもの生活の予想が持ちにくく不安が高まることは予想された。研究2で示されたように、入学後にはこれらの不安が漠然としたものであったことに気づき、子どもの成長に伴って別の不安や悩みに移行していく可能性が示唆される。「Ⅱ自分自身の生活の変化への期待」については、入学前後での変化は示されなかったが、子どもの出生順位によって、第2子以降の親のほうが期待していることが示された。これについても、既有知識として子どもが小学生に

小学校への移行期の子どもを持つ母親の適応に関する研究

Table 5 期待や不安の変化に関する主な記述内容

	1年生 (N=12)	2年生 (N=27)	3年生 (N=9)
新たな心配 就学前の不安の解消と	記述数 10 ・学校に慣れてきて、子どもが困っていない様子から、不安だったことは解消された。 ・まだあまり時間がたっていないので、様子がわからず、解消されない部分もある。 ・入学してから行事のことなどを知って、親のほうがやっつけられるか心配。	記述数 21 ・不安は解消された。 ・入学前に抱いていた不安は漠然としたものだったと思う。 ・特定の友達（嘘をつく、乱暴）の行動が心配。 ・この先の漠然とした不安はある（いじめや不登校、クラス替えなど）。	記述数 9 ・不安は解消された。 ・何が不安だったか思い出せない。 ・クラス特定の友達の攻撃性が気になる ・学習内容や教育方法の今後が気になる ・友達との関係でテレビゲームをするようになり、とにかくやりたがるようになって心配
子どもとの関わり	記述数 12 ・小学生として接するべきだとは思っている。 ・今まではなんでもやってあげたが、自分でやるようになるべく手を出さないようにしている。 ・親の知らない子どもの世界が急に広がった。子どもが外での出来事を必死に話そうとするのを聞いている。 ・学校での生活で疲れるようで、家では甘えたい姿を見せることもある。	記述数 23 ・徐々に見守ることのようになってきた。 ・自分のことは自分でできるように任せたいが、部分的に注意したり、確認したりすることが必要。注意がきつくなることもある。 ・子どもの友達関係について、親が知らない友達とも遊ぶようになったが、任せている。 ・学校での様子がわからない。会話だけだと要領を得ないこともある。	記述数 8 ・学校の準備や宿題など、自分のことは自分でするようにしている。基本的には見守っている。 ・少しずつ親から離れて子どもだけの世界を持ちつつあるように感じる。うれしくもあり寂しくもある。 ・一緒に過ごす時間が減った。 ・会話から普段の様子を知るようになった。
先生・学校との関わり	記述数 10 ・先生と話す機会がほとんどないので、身近な存在だとは思わない。 ・入学前までは連絡帳で細かくやりとりしていたが、学校での生活の様子を知る機会が減った。 ・先生との距離感を感じる。	記述数 24 ・幼稚園のときと違って、気軽に相談できる雰囲気ではない。 ・幼稚園の時は多くの情報を提供してもらったが、小学校は求めない情報が得られない。 ・幼稚園の先生は子どものことを共有しようとしてくれたが、小学校の「先生」からはそれが感じられない。	記述数 7 ・先生とのかわりは減り、相談しにくい雰囲気がある。 ・かわりの減少に最初は不安だったが、慣れてきた。
親自身の生活の変化	記述数 12 ・自分の時間ができたので習い事を始めた。 ・仕事の時間を変更した。 ・朝の時間の使い方が変わった（子どもを送り出すため） ・フルタイムの仕事を探し始めた ・未就学の子どももいるので、時間の使い方が難しくなった	記述数 26 ・自由に時間が使えるので、身体的にも精神的にも楽に感じる ・無職だったが、子どもが学校に行っている時間に近所でする仕事を始めた。 ・下の子がいるので、変化しない ・PTAや上の子どもの受験準備で忙しくなった。	記述数 8 ・仕事の内容に応じて、資格をとる勉強を始めた ・自分の今後のいきかたについて考えることが増えた。 ・生活のリズムが安定して、体調を崩さなくなった。
うれしかったこと 小学生になったこと	記述数 11 ・子どもが楽しく学校に通っている ・友達との関係が良好 ・子どもの成長（自立、お手伝い、会話）	記述数 24 ・子どもの成長（自立、思考、意欲、体力など） ・友達との関係が良好 ・子どもの送迎や弁当作りから解放された ・学費がかからなくなったので経済的に余裕ができた	記述数 9 ・子どもの成長（自己主張、勉強の習慣） ・親子で対等に意見を交わしあうことができる ・給食のおかげで苦手なものも食べる努力をするようになった

なると時間的余裕が生まれることを知っている、あるいは第2子以降の子どもが末子であるために余裕が生まれるなど、第2子以降の親の期待が高いことは想像に難くない。このことは入学後に現実のものとなり、研究2で示されたように、習い事を始める、仕事を始めるといった変化として現れている。一方で末子ではない場合には、下の子どもとの生活があることで時間の使い方の工夫に迫られるなど、きょうだい構成によっても影響を受けると考えられる。

入学後1～3年の変化に着目すると、子どもとの関わりにおいて「見守る」関わりへ移行すること、教師との密ではない関係に慣れること、自分の時間の使い方を工夫するなど、母親自身が変容する姿が示されている。これは母親自身が小学生の子どもをもつ親として適応的に変化していく姿であるとも考えられる。そしてその背景には子どもの成長を好意的に捉え、喜びと感じる姿があると考えられる。しかしながら、今回の調査では示されなかったが、親自身が変容することができなければ適応的な変化は望めない可能性もある。保護者支援という視点から考えると、岡崎・安藤（2018）が、就学前後の子育てにおいて保護者が必要とする支援として他の保護者との交流が求められていることを示しているように、就学後の子どもの様子や親の関わり方について多くの情報を提供する、他の親と共有する機会を提供するなどが、親の不安を減らし、親自身の変容を促す可能性があると考えられる。

本研究は就学前から就学後にかけての親の意識の変容に焦点を当てて検討を進めてきた。しかしながら、縦断研究の限界である対象者の減少という問題に直面し、対象者数は十分とはいえない。多様な保護者という視点で考える必要があること、また家族間のダイナミクスなどの個人要因にも踏み込めていないことから、今後はさらなるデータの蓄積を試み、それをもとに適応的な親の変容を促す支援策を検討していくことが必要であろう。

付記

本研究は JSPS 科研費 基盤研究 (C) 課題番号 18K02494 の助成を受けて行われた。

本研究の一部は、27th EECERA (ヨーロッパ乳幼児教育学会 2017 年イタリア) および 28th EECERA (同 2018 年ハンガリー)、30th EECERA (同 2021 年クロアチア・オンライン) において発表した。

文献

- 綾野鈴子・西坂小百合・村上康子・権藤桂子
2019 幼稚園から小学校への移行期の母親の適応要因 共立女子大学家政学部紀要, 65. 93-102.
- 棕田善之 2013 幼稚園から小学校の移行期における保護者の子どもへの期待と不安の変容過程—入学前と入学後の保護者へのインタビューを通して— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 53. 233-245
- OECD. 2017 Starting Strong V: Transitions from Early Childhood Education and Care to Primary Education. OECD Publishing, Paris.
- 岡崎由美子・安藤美華代 2018 就学前後の子どもをもつ親の子育て不安・子育て支援に関する検討 岡山大学教師教育開発センター紀要, 8, 193-206.
- 西坂小百合・綾野鈴子・村上康子・権藤桂子
2021 小学校への移行期の子どもを持つ母親の適応に関する研究—幼稚園・保育所による比較— 共立女子大学家政学部紀要, 67. 59-67.
- 富山尚子 2014 小学校への適応に向けて—小学校1年生の保護者の意識— 東京成徳大学子ども学部紀要, 3. 9-17
- 富山尚子 2015 小学校と保護者の連携—入学直後の保護者の意識— 東京成徳大学子ども学部紀要, 4. 1-8
- Wildgruber, A., Griebel, W., Niesel, R. & Nagel,

B. 2011 Parents in their transition towards school. An empirical study in Germany. Paper presented to the 21st EECERA annual Conference in Geneva, Switzerland.

謝辞

本研究の実施にあたってご協力いただいた幼稚園及び保育所と保護者の方々に厚く御礼を申し上げます。